

リーディング戯曲

# メイクアップ!

作…鈴木アツト  
2024年6月1日版  
第3稿

登場人物

- 安藤理沙（あんどうりさ）  
15歳 中学生。演劇部所属。
- 山崎陽子（やまざきようこ）  
15歳 中学生。部活には入らず、スイミングスクールの通っている。
- 岡田保（おかだたもつ）  
15歳 中学生。演劇部所属。

舞台は、2021年の東京・世田谷区のある中学校。季節は、十一月頃。

理沙を睨む陽子。沈黙の時間。

理沙 （観客に）卒業まで残り四ヶ月を切ったあの日。私は親友の陽子とケンカし

た。（陽子の方を向き）別に陽子を裏切ったわけじゃないよ。

陽子 いいや裏切った！私を裏切った。

理沙 私にとっては大きな、人生最大のチャンスなんだって。

陽子 たかが演劇部の引退公演が、人生最大のチャンス？

理沙 え？ たかが？

陽子 たかがじゃない！

理沙 、、オセロのデズデモーナ役なんだよ？

陽子 知らないし。

理沙 世界で一番の美人じゃなきゃいけないような役なんだって！

陽子 だからって化粧するの？

理沙 、、

陽子 卒業までアンチ化粧派でいようって約束したのに？

理沙 でも、どうせ高校生になったらお化粧するでしょ？ なら、今ちよつとだけし

たって、、

陽子 （遮って）私は一生、化粧をしないつもりだった！ 「男」たちの視線を気に

して、「男」たちに媚びた生き方をしないつもりだった！！

再び、理沙を睨む陽子。理沙は、客席に語りかけるように、喋り出す。

理沙 (隣の陽子を見ながら) 陽子は私の親友だった。

陽子 (理沙を見ずに) 理沙は私の親友だった。

理沙 昨日までは。

陽子 昨日までは。

理沙 小学校時代は同じスイミングスクールに通っていた。

陽子 夢が丘スイミングスクール。

理沙 スクールの玄関口には花壇があつて、

陽子 色とりどりのパンジーが咲き乱れていた。

理沙 花の香りにプールの塩素の匂いが混じる。

陽子 (鼻をクンクンさせ) ツーンとした塩素の匂い。

理沙 (鼻をクンクンさせ) この匂い、、、嫌いじゃない！

陽子 (同時に) 嫌いじゃない！

陽子 背泳ぎをしながら天井を見るのが好きだった。

理沙 (背泳ぎの仕草をしながら) グングンと進む頭上の景色。

陽子 水の中では体が軽くなる。

理沙 重力から解き放たれ、まるで宇宙を漂う星のように。

陽子 まるで彗星のように。

理沙 ハレー彗星のように。

陽子 誰にも負けない速さで水を掻いた。

理沙 水泳は時間との勝負。

陽子 水泳は自分との勝負。

理沙 タイムを更新する度に成長を実感できる。

陽子 無我夢中で泳げば孤独を忘れさせてくれる。

理沙 気がついたら、横のレーンで泳ぐ女の子と目が合った。

陽子 理沙だった。

理沙 陽子だった。

陽子 着替えの時に初めて話した私たち。あつという間に仲良くなった。初めてで

きた親友だった。中学に入っても、二年になっても、三年になっても、私たちは

親友同士だった。なのに、

理沙 箸が転んでもおかしかった。みんなとよく笑った。ケラケラって笑った。ウ

ツシツシって笑った。ガハハって笑った。でも中3の夏休みが終わると、一緒に

笑っていた女子たちの中に、お化粧をする子たちが現れた。

教室の中で。他の友だちグループに聞こえないように、やや内緒話口調の二人。そわそわとクラスの他の女子の様子を探りながら、

陽子 ねえ見て。

理沙 え？

陽子 あれ！

理沙 何？

陽子 佐伯さん、眉毛、抜いてるよね？

理沙 、、ほんとだ。いつからだろう？

陽子 わかんない。気づいたら、してた。

理沙 あっ！

陽子 どうした？

理沙 見て！

陽子 どこ？

理沙 原さん。

陽子 あっ！

理沙 原さん、マニキュアしてるよね？

陽子 、、ほんとだ。薄っすらピンク色！

理沙 あっ！

陽子 まだ他にも？

理沙 松田くん、眉毛つながってる。

陽子 それいつもだし！ どうでもいいし！

理沙 ごめん。でもあの二人、なんで急にお化粧を？

陽子 色気づきやがったんだ。色気づいて、自分に色を付け始めたんだ。ねえ、私たちはアンチ化粧派でいようね。

理沙 アンチ化粧派？

陽子 そう、アンチ化粧派。佐伯さんとか原さんみたいに、学校に眉毛抜いてマニキュアして来るのはもつてのほか。休みの日にだってお化粧はしない。

理沙 色つきリップは？

陽子 (驚いて) え？ 理沙、持ってるの？

理沙 いや、お姉ちゃんがね。私は持ってないよ。

陽子 色つきリップだつてダメだよ。なんのために唇に色つけるの？

理沙 自分のため？ 可愛くなるために。ゝ、ジコウテイカンにもつながるし。

陽子 いいや無意識に男のためにやってるんだよ。男にモテるために。じゃなきゃ、なんで女だけ色つけるの？ 化粧するの？

理沙 ゝ、

陽子 化粧なんてしなくたって、私たちは充分魅力的なの。

理沙 いつまで？

陽子 え？

理沙 いつまでお化粧しないつもり？

陽子 一生。

理沙 一生？！

陽子 は無理だから、とりあえず卒業までは。

理沙 (観客に) 陽子は、アンチ化粧原理主義者だ。女がお化粧するのは、男社会に強いられるからだと信じていた。実際、クラスでは男子に人気の女子たちがお化粧をしている。そして、お化粧をしない私たちを見下してくる。けど、ピンクやオレンジの色つきリップをした彼女たちが、ちよつと大人ぼく見えるのは、なんでなんだろう？

陽子 (観客に) 理沙と卒業まで化粧はしないって約束をした。十五で「男」の目を意識し始めたら、一生男の「目」に従って生きていくことになる。そんな人生は嫌。でも十二月の演劇部の引退公演の演目が、シェイクスピア？つてやつのはオセロ？つてやつに決まった日、、、私は理沙に裏切られた。

放課後の教室で理沙を待っている陽子。理沙が教室に入ってくる。

理沙 陽子！

陽子 理沙。

理沙 ごめん、待った？

陽子 全然。じゃ、帰ろっか。

理沙 あ、ちよつと待って。話したいことがあつて。

陽子 何？

理沙 今日、演劇部の会議があるつて言ったでしょ？

陽子 うん。引退公演の演目と配役を決める会議でしょ？



理沙 そう。それでね、私ヒロインやれることになったんだ！

陽子 ヒロイン？ そうなんだ！ おめでとう！ よかったね！

理沙 うん、シェイクスピアのオセロって作品の、デズデモーナっていう役なんだ  
けど、、、

陽子 デズデモーナ？ なんか悪魔みたいな感じの名前。魔女の役？

理沙 いや、魔女じゃなくて、とつてもきれいな女の人の役なんだ。

陽子 へえ、そうなんだ。

理沙 、、、

陽子 どうしたの？

理沙 舞台メイクはお化粧品に入る？ 入らないよね？

陽子 はい？

理沙 本番にはメイクしようかなあって思ったりして、、、

陽子 なんて？

理沙 だって引退公演だし、美人の役だし、、、

陽子 美人。

理沙 うん。

陽子 中学の演劇公演で化粧品が必要？

理沙 お化粧品っていうかメイクね。

陽子 、、、

理沙 必要だと思う。お客さんだって見に来るし。

陽子 お客さんって、私たち生徒とか家族でしょ？

理沙 プロと同じようにやりたいのじゃん。顧問のカトちゃんも、デズデモーナならメイクしたほうがいいんじゃないかって。

陽子 、、

理沙 別に陽子を裏切ったわけじゃないよ。

陽子 いいや、裏切った！私を裏切った。

理沙 私にとっては大きな、、人生最大のチャンスなんだって。

陽子 人生最大のチャンス？ たかが演劇部の引退公演が？

理沙 え？ たかが？

陽子 たかがじゃない！

理沙 オセロのデズデモーナ役なんだよ？

陽子 知らないし！

理沙 (観客に) その日から陽子は私と口を利かなくなった。

陽子 (観客に) 私は悪くない。舞台メイクを口実にして、化粧をしたがつてる理

沙が悪いんだ。

理沙 舞台メイクでさえ許してくれないのは、私の本心に気づいたから？ 実はお化粧に憧れてるって。

陽子 なんでみんな、世の中に合わせようとするんだろう？ 化粧で本当に自分が変わる？ 女らしさを押しつけられてるってことに気づいてないだけ。

理沙 でもたかがって言葉は言い過ぎだ。なんで私の大好きなものまで否定する

の？

陽子 私は悪くない。理沙が気づいてないなら、私が気づかせてあげなきゃ。

理沙 お化粧がしたい。もったきれいになりたいから。

陽子 化粧なんてするべきじゃない。見せかけのきれいななんていらない。

理沙 陽子は私じゃないし、私は陽子じゃない。私は私の道を行こう。

放課後、演劇部が練習に使っている教室。

保 「なあ、お前は何ものだ？」

理沙 ……

保 「なあ、お前は何ものだ？」

理沙 え？

保 「あなたの妻、嘘いつわりのないあなたの忠実な妻です。」 だろ？

理沙 ああ、…「あなたの妻、嘘いつわりのないあなたの忠実な妻です。」

保 「いいから、そう誓え、地獄に落ちるぞ、見かけは天使だから、悪魔もお前を捕まえるのをためらうかもしれない。だから嘘と裏切りという二重の罪を犯し、

貞節だと誓ってみろ！」

理沙 ……

保 「それは神様がよくご存じです。」 だろ？

理沙 ああ、…「それは神様がよくご存じです。」

保 おいおいおいおい、、、ちゃんと台詞入れてきてくれよ。

理沙 ごめん。シェイクスピアの台詞って、時代劇みたいだから覚えるの難しくて。

保 そんなの、最初からわかってただろ？

理沙 ……

保 しつかりしてくれよ。俺たちの最後の晴れ舞台なんだから。引退公演でシェイ

クスピア選んだの俺たちが初めてなんだって。演劇部の歴史に爪痕残そうぜ！

理沙 うん、、、ごめん。

保 なんかあった？

間。

保 もしかして山崎とケンカしたの？

理沙 え？なんで？

保 最近、一緒に帰ってないじゃん。

理沙 陽子は最近、、、塾が忙しくなってきちやっただよ。別にケンカなんかしてない。

保 そう？ならいいんだけど。

理沙 ねえ、岡田くんは、クラスの女子たちのお化粧ってどう思う？

保 急になんだよ。

理沙 最近クラスで流行ってるじゃん、お化粧。男子から見て、どう見えてるのか

なっと思って。

保 卒業まで半年切ったしね、自分の未来を想像し始めてるんじゃない？

理沙 え？ 未来？

保 だって高校行かないで働き始める奴だっているし、そしたらすぐに大人にならなきゃいけないし。お化粧って大人になるための準備？

理沙 ……

保 うちの姉ちゃんはさ、アルバイト始める時にお化粧し始めたよ。

理沙 (真剣に) 社会に出たらお化粧は絶対しなきゃいけないもの？

保 え？…、わかんねえよ、そんなの。

理沙 ……、そうだよ。わかんないよね。

理沙、笑う。

保 なんだよ？ 何が可笑しいんだよ。

理沙 いや、なんか岡田くんを問い詰めちゃったから。

三人、それぞれに観客に語る。

理沙 (観客に) 誰にも言えないけど…、私は岡田くんが好きだ。本当は「お化粧してる女子と、してない女子、どっちが好き？」って聞きたかった。岡田くんと

共演するからメイクをしたい。岡田くんには、世界で一番美しい、それは無理でも、夢中（ゆめちゆう）一美しいデズデモーナを見てほしい。

保 （観客に）誰にも言えないけど、毛深い俺は、毎日うぶヒゲを剃っている。

俺の小汚い顎のうぶヒゲ、どうしたら無くせるんだろう？

理沙 好きな男子がいるからお化粧したいなんて。私は一生男の「目」に従って生きていくことになるんだろうか？

保 自分の体が好きじゃない。やせ型だし筋肉が全然つかない。色白でもやしっ子ってずっと言われてきた。なのに最近では体毛だけは濃くなっていく。神様、毛じやなくて男らしい体をくれよ。

陽子 （観客に）私は演劇が嫌いだ。特に中学校の演劇部が嫌いだ。恥ずかしくないわけ？ 大きな声で自分の心の奥を吐露して。しかもそれを自分たちだけが理解できるんだって得意気に演じて。自分たちはキラキラしてるつもりでも、全然キラキラしていない人たち、それが演劇部。なのに理沙は中学に入ると突然水泳を辞め、演劇を始めた。

中学に入ったばかりの、陽子と理沙。

陽子 え？ なんで演劇部？

理沙 え？ なんでって？

陽子 スイミングスクール続けないの？

理沙 だって中学で続ける人、みんな選手コースの子だよ？

陽子 選手コースじゃなくなたって続けてる子もいるって。

理沙 私はもういいんだ。バタフライまでできるようになったし。

陽子 個人メドレーで1分50秒切ろうよ！そしたら私たちも選手コースに行ける！

理沙 次は演劇部に入りたいの。私、俳優になるんだ。

陽子 俳優？

理沙 この前ミュージカルを見てさ。女優さんが、背が低くて体小さいのに、大劇場を震わすような演技をした。私、興奮してドキドキが止まらなかった。私も演じる人になりたいって思った。

陽子 …、

理沙 スクールは辞めちゃうけど陽子とはずっと親友だから。偶に泳ぎにも行くし。

陽子 ありがとう。(観客に)そして理沙は、時々私が知らない単語を使うようになっていった。

理沙 レミゼ、エリザベート、ストプレ、シェイクスピア！

陽子 理沙は私の知らない世界を知っている。どうして裏切られた気分になってしまったらどうする？

再び、中学に入ったばかりの、陽子と理沙。

理沙 ロミオとジュリエットぐらいは聞いたことない？

陽子 聞いたことない。

理沙 「名前って何？ 薔薇と呼んでいる花を別の名前にしてみても、美しい香りはそのまま。」

陽子 何それ？

理沙 ロミオとジュリエットの台詞！ いい台詞でしょ？

陽子 どうかな？

理沙 今度、台本貸すから読んでみて。絶対、陽子も好きになるって。

陽子 （観客に）そう言われて借りてはみたけど、読まないで返してしまった。私は演劇がわからない。親友って何？ 私たちの部活が別になっても、二人の友情はそのまま？

保が観客に語る。

保 （観客に）みんな知ってます？ ゲームのオセロの名前の由来は、シェイクスピアが書いた演劇『オセロ』だって。オセロは主人公の黒人將軍の名前。白人の妻・デズデモーナを中心に敵味方がめまぐるしく寝返る、そんなストーリーにちなんで『オセロ』と名前がつけられたってわけ。

保 黒人將軍オセロ。白人の將軍たちの中で、実力だけで成り上がった黒人オセ



ロー。顧問のカトちゃんは「黒塗りのメイクはしないほうがいい」って言ったけど、俺は、本物のオセローになってみたかった。男の中の男、軍人のオセローに！

保、鞆からドーランを取り出す。

保 下北沢の舞台メイク専門店で、ドーランを買った。自分の顔に、

と言いながら、ドーランの蓋を開け、頬に一筋塗る。

保 塗ってみた。黒光りする俺の肌は、まるでモーガン・フリーマンのようだった。強くなった気がした。うぶヒゲも目立たないし。

逆側の頬に一筋塗る。

保 おお、クラスの女子たちの間でお化粧が流行ってるのが、なんかわかる気がする。化粧には自分を変える力がある。自分を変身させる力がある。オセローを演じたい、このメイクで。鏡の中で黒い俺がそうつぶやいていた。

放課後、演劇部が練習に使っている教室で。

理沙 え？ どうしたの？

保 どう？

理沙 どうって、、、

保 今、トイレで塗ってきた。俺、これでオセローを演じようと思うんだ。

理沙 怒られるよ。

保 安藤だってメイクする予定なんだろう？ デズデモーナ。

理沙 そうだけど、それって黒塗りメイクじゃん。それ、ブラックフェイスって言うって、差別になっちゃうやつだよ。

保 差別する意図はない。むしろリスペクトだよ。

理沙 え？

保 白人社会で成り上がったオセローへのリスペクトを込めて。実際このメイクすると、なんだか力をもった気がするんだよ。

理沙 でも、、、

保 何？

理沙 そうは思わない人はいるよ。

保 賛否両論のない作品なんてアートじゃない。芸術じゃない。

理沙 でも私たちの引退公演なんだよ？

保 おいおいおいおい。自分だけメイクしてデズデモーナになって、俺はオセローになれないのか？

理沙 岡田くんは黒塗りにしなくたって、演技力でオセロに見えるよ。

保 いいや見えない！俺は、誰が見てもそうだと感じられる、本物のオセロになりたいんだ！

理沙 とにかく、一旦そのメイク取ろう。

保 嫌だ。俺は自分のやりたいようにやる！

ガタンと物音がする。

理沙 え？

保 誰がいる？

保、教室の戸を開け、廊下を見るが誰もいない。

保 誰もいないよ。

理沙 ねえ、黒塗りはカトちゃんにOKもらってからにしようよ。

保 なんで大人にソントク（付度）してんだよ？

廊下の陰に隠れていた陽子。

陽子 （観客に）理沙と仲直りしようと思ってきたのに、なんで私は隠れてる？し

かも理沙は、また私が知らない演劇の言葉を吐いている。ブラックフェイス？ すぐにググった。黒人以外の俳優が、黒人を演じるためにする舞台化粧。なんかヤバイ響きがした。やっちゃいけない感じ。もしかしたら演劇部の公演、中止にできる？ 理沙が化粧をするのを止(と)められる？ 悪魔の思いつき。親友なのに、親友なのになんで私は、理沙を邪魔したいの？

陽子 止めたいのに自分を止められない。スマホを取り出した。ツイッターの自分だけしか知らない裏アカにログイン。そして私は、裏切りのマッチで火を付けた。

帰宅した理沙と保。それぞれの部屋で。

理沙 (観客に) それを知ったのは自主稽古を終えて家に着いた時。晩御飯までの時間、ベッドでゴロゴロしながらツイッターを見てたら、何これ？ (観客に) すぐに岡田くんに電話した。

保 お、どうした？

理沙 岡田くん！ ツイッター見て！

保 何？

理沙 私たちが炎上してる。

保 は？ どれ？

理沙 これ！

保 (ツイッターの投稿を読み上げる) 夢中(ゆめちゆう)の演劇部が黒塗りだつて、まじありえない!

理沙 (ツイッターの投稿を読み上げる) オセロをブラックフェイスでやる? 顧問は何考えてんだよ?

保 (ツイッターの投稿を読み上げる) これ、差別につながってるって意識なかったんすかね。

理沙 (ツイッターの投稿を読み上げる) ブラックライブスマター、ガン無視? 保 誰がこんな投稿を?

理沙 わからない。匿名だから。あ、今、カトちゃんからLINEが。職員室でも話題になってるって。

保 …、

理沙 どうしよう? 引退公演できるのかな?

保 俺はやるよ。このままで。

理沙 え?

保 ちようどいい。カトちゃんに説明する手間が省けた。俺はリスペクトを持って、黒塗りでオセロをやる。

理沙 ダメだって。そんなことできるわけないって。

保 言っただろ? 賛否両論のない作品なんてアートじゃない。

翌日。学校の教室で。

陽子 (観客に) 次の日、クラスでは演劇部の話で持ち切りだった。昨日までブラツクフェイスなんて言葉、知らなかった同級生たちも、岡田くんを、そして理沙を責めていた。

理沙 (観客に) 誰も私と話さなくなった。陽子とはもう一週間話してないけど、今日からは誰とも。陽子を見る。陽子は私を見ないようにしてる。

保 (観客に) みんなが白い目で俺を見る。クラスの視線がチクチクと俺を刺す。痛っ、痛っ痛っ。(叫んで) 俺は、ここにいる誰よりも黒人について考えていたんだぞ？ オセローがどれほど差別に耐えていたのか、俺には自分のこととして想像できてる。なのになんで俺が差別主義者なんだ！

陽子 私は悪くない。悪いのは私を裏切った理沙だ。

理沙 どうしてこんなことになったんだろう？ 誰がブラックフェイスのことをネットに書き込んだんだろう？ 私と岡田くんしか知らないのに。まさか、、

保 お前ら、オセローの何がわかるんだよ？

理沙 (観客に) 突然、岡田くんが声を上げた。

保 何もしないで、この肌のままで、オセローの苦しみがわかるのか？

理沙・陽子 、、

保 「艱難辛苦をもって俺を試験にかけるのが天の御心だとしても、、」

陽子 (観客に) 岡田くんは、鞆からドーランを取り出し、自分の顔に塗りたくった。

理沙 岡田くん！

保 「ありとあらゆる苦痛や恥辱がむき出しの俺の頭に降りそそぎ、口元まで貧窮の苦しみにひたされ、最後の希望と共に囚われの身になったとしても！」

沈黙。

保 えーん。

理沙 (観客に) 突然、岡田くんは泣き始めた。

保 えーん。えーん。

理沙 (観客に) 子どもみたいに岡田くんは泣いた。

保 えーん。えーん。えーん。

理沙 (観客に) 中一の時に泣いてる男子はよく見たけど、中三になってからは初めてだった。そして岡田くんは、走って教室を出て行った。

陽子 岡田くん！

理沙 (観客に) 私がそう呼ぶ前に陽子と呼んでいた。そして陽子も走って教室を出て行った。(保と陽子に) 岡田くん！陽子！

陽子 (観客に) 階段を駆け降り、校舎を飛び出す岡田くん。どんどん小さくなるその背中、校庭のはしっこ、プールの前で突然止まった。

学校のプールの前で。

保 （観客に）強くなりたかったのに、モーガン・フリーマンみたいになりたかったのに、俺は泣いちゃった。

陽子 岡田くん。

保 山崎、、、

陽子 大丈夫？

保 うん。すつきりした。

陽子 、、、

保 なんで山崎が追いかけて来るんだよ？

陽子 、、、

保 おい。

陽子 ごめんなさい。

保 え？

陽子 炎上させたの私なの。ツイッターに書き込んだの私なの。

保 え？ そうなの？ どうして？

陽子 、、、 理沙が化粧するのが嫌で、炎上すれば演劇部の公演無くなるかもって思

つて、、、ごめんなさい。

保 、、、

陽子 私、、、



保 山崎も、ブラックフェイスはダメだと思う？

陽子 え？

保 俺、ブラックフェイスにも、いいブラックフェイスと悪いブラックフェイスがあると思うんだよ。俺たちがオセローを黒塗りでやらなかったら、普通になっちゃうだろう？ 波風も立たず、そういう差別が今もあるかもしれないってことに、蓋をすることにならない？

陽子 、、

保 ねえ。

陽子 そうかもしれない。

保 だろ？

陽子 でもイエローフェイスだったら？

保 え？

陽子 私もちゃんとは知らないけど、イエローフェイスって言葉もあるでしょ？ ア

ジア人以外の俳優が、アジア人を演じるためにする舞台化粧。昨日ググった時に画像が出てきたんだ。顔を真っ黄色に塗った写真。

保 、、

陽子 そんな時思ったんだ。私たち、黄色人種かもしれないけど、でもこんな真っ黄色の肌してないって。私たちの肌は、よく見れば一色じゃないし、一人一人違うじゃん。

保 、、

陽子 オセロの肌だって、一色の黒じゃなくて複雑な黒だったんじゃない？

保 オセロが黒塗りのメイクを見たら、傷つくってこと？

陽子 多分。

保 でも、

そこへ、理沙が走ってくる。

理沙 岡田くん。陽子。

保 安藤。

理沙 大丈夫？

保 うん。

陽子 理沙、、、私、、、

理沙 プール入ろ。

陽子 え？

保 安藤、お前おかしくなったのか？

理沙 (笑いながら、保に) 岡田くんに言われたくないよ。(陽子に) ねえ、久し振りにプール入ろ。全て洗い流すために。

陽子 十二月だよ？

理沙 うん。

陽子 水汚いよ。

理沙 うん。

保 俺、泳げないんだけど。

理沙 大丈夫。学校のプールなら足はつくから。

保 まじかよ。

陽子 (観客に) 私たちは、ネットを乗り越えて、少し苔が生えている十二月のプールに忍びこんだ。

保 本当に入るの？

理沙 うん。その顔、洗い流さなきゃ。

保 別に、後でトイレで洗えばいいじゃん。

理沙 いいから。行くよ！

陽子 (観客に) 目の前のプールを見ながら、私たちは考えていた。

保 (観客に) 悪いブラックフェイスはあるとして、いいブラックフェイスはないのだろうか？

陽子 (観客に) いいブラックフェイスがあるとして、いい化粧もあるのだろうか？

理沙 (観客に) お化粧は自分でしているのだろうか？ 誰かにさせられているんだろうか？

保 「なあ、お前は何ものだ？」

陽子 私は、何ものなんだろう？ それは高校生になればわかるのだろうか？

理沙 大人になればわかるのだろうか？

陽子 (観客に) 「なあ、お前は何ものだ？」

理沙　じゃあ、行くよ、せーの！

ドボンという音がする。

三人　冷たいく！

終わり。

※劇中の「オセロー」の台詞は、筑摩eブックスの、松岡和子訳より引用しました。